

機関番号：31307

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520589

研究課題名（和文） 北日本地域における田村麻呂・義経伝説の近世的展開

研究課題名（英文） The critical study on the legends of Tamuramaro and Yoshitsune in the early modern North Japan area

研究代表者

菊池 勇夫（KIKUCHI ISAO）

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：20186191

研究成果の概要（和文）：基礎的な作業として近世の文献史料から田村麻呂伝説および義経伝説の記述を抜き出して蓄積した。また、義経の蝦夷渡りを物語る津軽地方三厩における数種類の観世音縁起の成立事情、仙台藩の儒医相原友直による義経蝦夷渡り説に対する考証的な批判、松浦武四郎における義経＝オキクルミ説への親和的な態度と同化主義に果たした役割、仙台藩領における田村麻呂の悪路王・高丸・大武丸征伐物語の変遷、などについて解明した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, this study compiles references to the legends surrounding the historical figures of Tamuramaro and Yoshitsune in written sources from early modern Japan. It also elucidates the background to the several versions of the Tale of the Origin of the Kanzeon Buddhist Deity from the Minmaya region of Tsugaru, examines the critical study of the Legend of Yoshitsune's Escape to Ezo land by the Sendai Domain confucian scholar Aihara Tomonao, Matsuura Takeshiro's sympathetic stance towards the conflation of the Ainu hero Okikurumi with Yoshitsune and the role that his views played in assimilation policies towards the Ainu, and changes over time of the legends within Sendai Domain concerning the Ezo leaders known as Akuroou, Takamaru, and Ootake.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本近世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：義経蝦夷渡り伝説、田村麻呂伝説、観世音縁起、相原友直、松浦武四郎、菅江真澄、偽書批判、オキクルミ

1. 研究開始当初の背景

近世に著述・編纂された東北（陸奥・出

羽）・北海道（松前・蝦夷地）に関する地誌・随筆・史書の類を紐解くと、古代の伝説的な

英雄日本武尊や、阿倍比羅夫・坂上田村麻呂による「蝦夷征伐」、平安末期の前九年・後三年の合戦の源頼義・義家、あるいは鎌倉の源頼朝の圧力で藤原泰衡に攻められ自害した源義経など、古代・中世移行期の東北の歴史に関する史伝が数多く記されている。とりわけ田村麻呂伝説や義経伝説に関する伝説がきわだっており、これらの伝説が地域アイデンティティとどのような関わりをもっているのか、きわめて重要なところに位置している。

また、伝説を受け止めている東北地方の人々の問題がある。義経が衣川の館で自殺せず生き延びて蝦夷へ渡ったという、いわゆる蝦夷渡り伝説（北行伝説）についていえば、研究の上ではそれが 17 世紀後半になってはじめて語られ出した伝説であることは明らかであっても、今日、少なくない人々、とくに東北地方の一部の人々は熱狂的に、それが「真実」であるかのように信じきっている。歴史（事実）と伝説が区別できないことの責任の一端は、歴史学という学問が伝説を俎上にあげ史料批判してこなかったことにも起因している。信じるという意識のあり様自体のなかに歴史意識が埋め込まれているともいえる。

このような課題意識あるいは現状に鑑み、田村麻呂と義経に関する伝説の批判的な歴史研究を志すに至った。従来、坂上田村麻呂や源義経の史実に基づいた実証的な人物史研究の蓄積があり、その伝説についても豊田武『英雄と伝説』、堀一郎『我が国民間信仰の研究』、金田一京助「義経入夷伝説考」、島津久基『義経伝説と文学』などによって研究の基礎が作られ、その後の研究も少なくない。本研究においてこれらの先行研究を学びつつも、しかし、まだ十分明らかとなっていない田村麻呂伝説・義経伝説の近世的な展開を跡付けようと考えた。

2. 研究の目的

近世の文献史料（地誌・史書・寺社縁起など）から、北日本地域における坂上田村麻呂の「蝦夷征伐」伝説（物語）と源義経の「蝦夷渡り」伝説（物語）を広く収集し、その伝説（物語）の近世的な生成・展開または変容のプロセスについて、時代背景と関わらせながら具体的に明らかにすることを目的とした。また、そうした伝説（物語）が発信して

いる幕藩制社会の政治的な意味を問いながら、奥羽民衆の郷土・地域認識やアイヌの人々の民族意識にあつて受容あるいは反発など、どのような影響を与えたのか考察することとした。さらに、そのような作業を通して、伝説批判の方法、史実と伝説の関係について検討・吟味することも意図した。

伝説は言い伝えとして古くから存在していたかのように語られるのが常である。しかし近現代になって記録された伝説のなかには案外に新しいものが付け加わったり、改められたりして、それ以前に語られていたことと違っている場合がある。その時代の要請や雰囲気によって、時代に合うように創り出され、脚色・改変され、あるいは新たに伝説が作られていくものである以上、その展開を跡付ける作業がそれぞれの時代の研究によって明らかにされていかねばならない。

今日でも観光などと結びついて再生産されている田村麻呂・義経伝説が無批判に古代の事跡をそのまま伝えるものとして信じられてしまい、歴史と伝説の確かな境界線が曖昧になっている。昨今の義経蝦夷渡り伝説はそのような言説で満ち溢れている。蝦夷渡り伝説は史実ではないと退けるだけではそのような言説にほとんど無力である。伝説がどのように作られ語れてきたのか、その変遷を丁寧に明らかにしていかないと説得性を持たない。古代・中世と現代が時空を超えてつながってしまう田村麻呂・義経伝説を、近世という時代の伝説の語りを間に入れることによって、伝説の歴史研究に貢献しうるものとする。

むろん、そのような一般的な伝説研究の意義だけを強調したいわけではない。これまでアイヌ民族を含む北日本地域の歴史研究を行ってきたが、伝説研究を組み込むことによって精神的な領域によりいっそう踏み込んで地域の人々の歴史が明らかにできるのではないかと考える。今日、東北地方で語られる義経蝦夷渡り伝説は、偽書「東日流外三郡誌」を生み出してしまう精神構造と共通する、中央から迫害を受けてきたという屈折した東北敗者意識、被害感情によって下支えされている。伝説の分析・解体作業を通して、地域の歴史意識、地域アイデンティティを読み解き、妄想的な呪縛から解き放たれていく回路を提示していくことによって、そのような負の地域・郷土意識の変革にも貢献できるの

ではないかと、本研究の意義を理解している。

3. 研究の方法

具体的には以下にあげた方法ないし計画によって研究を進めた。

(1) 近世の文献史料（地誌・史書・寺社縁起など）から、時間の許すかぎり田村麻呂・義経伝説を抽出・集積し、地域に即した具体的な個別研究の土台を築く。岩崎克己編『義経入夷渡満説書誌』が義経蝦夷渡り伝説を近世・近代の文献からかなり網羅的に収録しているが、北日本地域の文献からさらに細かく集めていく。田村麻呂に関しても「奥浄瑠璃」をはじめとして国文学的な研究が少なくないが、近世という時代を意識して必ずしも伝説が収集されていないので、事例を蓄積していく。

(2) 北海道におけるアイヌの人々を含む義経伝説の展開について明らかにしていく。和人によって義経＝オキクルミとして持ち込まれ、いっていいアイヌ社会に浸透していく側面もあり、アイヌ支配における機能を問う。そのさいに松浦武四郎の蝦夷日誌類が有効な分析素材となろう。

(3) 「奥浄瑠璃（仙台浄瑠璃）」のさかんであった旧仙台藩領における田村麻呂や、高丸・大嶽丸（大竹丸）について、佐久間洞巖の『奥羽観蹟聞老誌』や安永期の『風土記御用書出』などの地誌類を使った田村麻呂伝説の考察を行う。

(4) 仙台藩の儒医相原友直は『平泉実記』など平泉関係の史書・地誌類を著し、義経蝦夷渡り伝説への批判者として知られる。そうした批判がどのようにして可能だったのか、友直の考証的態度について考察を加える。

(5) 菅江真澄の日記・随筆の記述を手掛かりとして、各地域の田村麻呂・義経伝説を検討していく。他の地誌・記録類では得られない観察眼、ないし記述がみられる点が特色となっている。

(6) 文献の収集とともに、伝説地を巡見・確認し、参考に資する。

4. 研究成果

3年間の成果は冊子体として『北日本地域における田村麻呂・義経伝説の近世的展開』にまとめたので、詳しくはそれを参照されたい。この冊子体は、論考編（第Ⅰ部）と資料編（第Ⅱ部）とからなっている。

さきに資料編から述べると、義経伝説と田村麻呂伝説とに分けて、すでに岩崎克己編『義経入夷渡満説書誌』に収録されているものはおおむね省き、『菅江真澄全集』、松浦武四郎の著作（『三航蝦夷日誌』『新版蝦夷日誌』『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』など）、『北門叢書』、『日本庶民生活資料集成』、『新編青森県叢書』、『新撰陸奥国誌』、『青森市史』、『新編弘前市史』、『八戸の神社寺院由来集』、『新秋田県叢書』（第一期～三期）、『仙台叢書』『平泉町史』、『陸前高田市史』などから、関係箇所を抜き出して集積した。寺社の略縁起や近代の町村誌・伝説集などは時間的制約から収録できなかったが、期間内にいくつかの論考をまとめていくうえで、地域でどのような伝説が語られてきたのかおおよその全体が把握でき大いに役立った。今後の研究にとっても益するものがある。

つぎに論考であるが、本研究テーマに直接関連する論考を4本作成したほか、多少とも関連する論考をいくつか公表した。その概要を示しておく。

(1) 青森県三厩の観世音縁起を素材に、義経蝦夷渡り伝説の地方的展開のありかたについてケーススタディを行い、公表した（「義経蝦夷渡り伝説の地方的展開」）。ここでは、義経が三厩から北海道（松前）に渡ったとする言説がいつ頃から登場してくるのか考察するとともに、三厩の義経伝説に関する4つの縁起、すなわち①延宝元年（1673）の年号が記された「延宝縁起」、②元文3年（1738）頃と推定されている「略縁起」、③菅江真澄が天明8年（1788）に聞いた「足羽観音物語」、④寛政11年（1899）の秦櫛丸の改作縁起の、それぞれの成立事情について検討を加えた。その結果、①②とも古いものではなく寛政期になってから作られた縁起であり、対ロシアの危機意識が高まった蝦夷地情勢を背景に、いわば蝦夷地派遣の幕府役人らによって見出された三厩蝦夷渡り物語であることを明らかにすることができた。

(2) 『平泉雑記』など奥州平泉に関する地誌3部作を著わした相原友直の義経蝦夷渡り説否定論について考察を加えた（「地誌考証と偽書批判」）。義経が平泉で死なずに逃げ蝦夷地に渡ったとする物語・伝説が近世中期以降流布し、それを史実であるかのように信用してしまう風潮のなかで、それは史実ではなく偽作だと徹底して批判を加えていたの

が友直であった。とりわけ義経蝦夷渡りを説く『義経勲功記』『鎌倉実記』に対する批判がどのようなものであったかを検討し、友直の地誌考証の態度や方法について、正史・野史・郷説の3つのレベルが存在することを明らかにした。

(3) 松浦武四郎の『三航蝦夷日誌』以下の大部にわたる蝦夷地関係の著作に紹介された義経伝説(物語)をほぼ網羅的に集めて、義経伝説に対する武四郎の親和的な態度について批判的に考察した(「松浦武四郎と義経蝦夷渡り伝説」)。武四郎は幕末期のアイヌ社会のおかれている悲惨な状態を告発した人物として知られているが、その一方でアイヌの側からの自発的な同化を促す立ち位置にあった。そうした立場から、松前・蝦夷地の義経伝説の遺跡・物語を詳しく紹介し、義経の蝦夷渡りをおおむね事実として受け止め取り扱っていた。義経=オキクルミ(人文神)説をアイヌ自身が物語っているかのような説明を武四郎がしているが、その個所を吟味していくと決定的な証拠はなく曖昧ななかの印象づけとなっている。アイヌ内国民化のなかで果たした義経伝説の政治性は否定できないとあらためて認識できたと思う。

(4) 仙台藩の近世中期に編纂された『奥羽観蹟聞老志』などの地誌類から坂上田村麻呂の東夷征伐・異賊征伐の伝説を抽出し、寺社の縁起や地域アイデンティティと関わってどのように語れていたのか考察した(「仙台藩地誌にみる田村麻呂伝説」)。仙台藩領における田村麻呂伝説の分布を郡ごとに概観し、とくに宮城県北部や岩手県南部に濃厚に語れており、磐井郡の達谷窟や、栗原郡の小迫観音、登米郡の鱒淵観音など七観音の由来を語る有力な伝説発信地がみられることを確認できた。また、仙台藩における田村麻呂伝説は、歴史的には達谷窟・悪路王伝説および高丸伝説が中世以来からあるのに対して、七観音・大武(大嶽)丸伝説は近世に入ってから展開したものであることを示しながら、それぞれの物語の背景や特徴について論じた。

(5) その他、いくつかの関連論考において、仙台藩領の窟(岩屋)伝承のなかには、田村麻呂伝説(鬼征伐)が入り込んでいるのがみられること(「近世地誌のなかの骨寺・山王窟」『既刊東北学』21)、奥州の歌枕は仙台藩と盛岡藩とがその所在をめぐって競い合っているが、壺の碑のように田村麻呂伝説が

色濃く投影しているものがあること(「競い合う歌枕」『覚醒する地域意識』)、同じく歌枕の「みちのく山」=八甲田山説と関わって入内の観音縁起に幕末期になって田村麻呂伝説が登場してくること(「真澄の『ひがおもひ』」『真澄学』6)、といった点に言及し論じた。田村麻呂伝説が近世後期、さらには近代に入ってさえもなお浸透・発展しているのに気付かされた。

およそ以上のような考察であるが、冊子体の論考編には上の(1)~(4)に、本研究の直接の前提となった「義経蝦夷渡り(北行)伝説の地方的展開をめぐって」を含めた。

なお、義経・田村麻呂伝説の遺跡・由緒があるとされる、北海道日高地方・積丹半島、青森県三厩周辺・八戸市周辺・下北地方、岩手県久慈市周辺・平泉町周辺・宮古市周辺、秋田県湯沢市周辺、茨城県古河市、埼玉県栗橋市などを巡見し、デジタルカメラで撮影しCD・DVDに保存した。今後の研究に生かしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ① 菊池勇夫、義経蝦夷渡り伝説の地方的展開—三厩の観世音縁起をめぐって—、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報、査読無、42号、2009、pp.1—22
- ② 菊池勇夫、地誌考証と偽書批判—相原友直『平泉雑記』の義経蝦夷渡り説否定論を中心に—、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報、査読無、43号、2010、pp.31—53
- ③ 菊池勇夫、松浦武四郎と義経蝦夷渡り伝説、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報、査読無、44号、2011、pp.1—28

[その他]

研究成果報告書として『北日本地域における田村麻呂・義経伝説の近世的展開』(2011年3月1日、宮城学院生活協同組合印刷・製本、239頁)を発行し、近世史関係者等に配布。宮城学院女子大学図書館で閲覧可能。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊池 勇夫 (KIKUCHI ISAO)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：20186191